27PE-pm065

理礼氏薬物学(第七巻)にみる薬物

○木村　壮太郎[2], 小松　直登[3], 澤田　采佳[4], 西野　ゆり[6], 林　優樹[7], 森田　祐基[5], 西野　正雄[7], 菰田　綾佳[2], 高倉　弘士[8], 宮本　如奈[1], 畠山　有理[9]([1]同志社大学(文), [2]府立藤井寺高校, [3]府立東住吉高校, [4]府立西浦高校, [5]科学技術学園高校, [6]府立長野高校, [7]府立富田林高校, [8]立命館大学大学院(社), [9]長崎大学(薬))

「はじめに」：明治五年に刊行された理礼氏薬物学は、アメリカの戒施理礼著、備後福山の小林義直訳の一五冊一七巻の書物である。第七巻全文を解読し紹介する。

「内容」：理礼氏薬物学は、一六巻で構成されている。漢字とカタカナ、時にカタカナを付けた英語により表記されている。巻七巻では脳髄衝動薬を扱っている。内容は、アヘン（モルヒネ、ナルコチナ、コデーア、ナルセーア、パラモルヒネ、メコニン、メコニー酸、チンキ（ラウダニューム）、龍脳チンキ、無臭チンキ、酢製チンキ、アヘン酒、アヘン酢、アヘン蜜剤、複方トコン剤、アヘン丸、複方石鹸丸、硫酸モルヒネ、硫酸モルヒネ水、酢酸モルヒネ、塩酸モルヒネ、クエン酸モルヒネ、重メコニー酸）、チリタキス（チリタキス糖煉）、ヒヨス（ヒヨスエキス、アルコールエキス、流動エキス、チンキ）、ハシリドコロ（ペラドンナエキス、ペラドンナ軟膏、ペラドンナチンキ、ペラドンナ硬膏、アトロピン、硫酸アトロピン）、曼荼羅（曼荼羅チンキ、曼荼羅エキス、アルコールエキス、軟膏）、蜀羊泉（蜀羊泉煎、蜀羊泉エキス、流動エキス）、ホップ（リュピュリナ、ホップ浸、リュピュリナ油脂）、大麻エキス（精製エキス、大麻チンキ）、シウキウタ（シキウタエキス、流動エキス、シキウタチンキ）龍脳（龍脳擦油、石鹸擦油、コッコリュスなどが記載。

「考察」：ホップの医治性能で、強壮、弱い麻酔性を持ち、不眠を伴った衰弱病、神経痛に用い、アヘン薬や麻酔薬が使用できない疼痛に良好な鎮痛薬であり、神経病の不眠を鎮静し、激痛のある腫脹に用い、更に麦酒の苦みとして強壮の性質を与えるものとして多用されていると当時まだ一般的ではない麦酒について触れられており興味深い。